様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２６０８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１０４８５

研究課題名（和文）小児プライマリケアの視点にもとづく小児救急看護実践ガイドの開発

研究課題名（英文）Development of Guidelines for the Pediatric Emergency Nursing Practice Based on the Primary Care Perspective

研究代表者
西田　志穂（Nishida, Shiho）

共立女子大学・看護学部・教授

研究者番号：６０４０９８０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、小児プライマリケアの視点にもとづく小児救急看護実践ガイドの開発を行うことである。救急外来では子どもの症状に応じて受診する保護者がいる一方で、不安による受診もあった。看護師は、子どもの緊急度判定だけでなく、家族の状況を確認した上で親子に関わるが、予防的なケアは行われていなかった。実際のトリアージでは、親子の様子を観察し、普段の様子が話題にできるようにして話を引き出していた。これらの結果から、小児プライマリケアの視点でのガイドの柱と下位項目を、予防：疾患予防や事故予防、教育：症状の再発予防、事故再発予防、虐待対応、ケア調整：多職種多機関連携、移行（期）ケアの3つを原案とした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
小児医療には、子どもの健康を守るだけでなく、親に安心を与え養育を支援する観点からの整備と機能が期待され、受診患者を軽症の段階で終わらせる予防的な小児救急医療が必須となる。小児の救急外来では、確定診断の可否にかかわらず「帰せるかどうか」の判断は必ずなされる。これは、症状の経過を予測しての判断に止まらず、帰宅後の養育状況を予測して「その家庭に帰せるか」の見極めも含まれる。不適切な育児方法や養育環境が、子どもの病状に影響しうる状況にあっては、子どもの生活と家族の養育を含めた家族の機能や家庭環境のアセスメントは不可欠であり、その判断のためのガイドの存在は、小児救急看護の質と技術の向上に寄与できる。

研究成果の概要（英文）：This study's aim was to develop a pediatric emergency nursing practice guide based on a pediatric primary care perspective.
While some parents visited the emergency department in response to their child's symptoms, others visited due to anxiety. Nurses were involved with parents and children after checking the family situation as well as assessing the urgency of the child, but preventive care was not provided. During the actual triage, the parents and children were observed, and their usual situation was elicited so that they could talk about it. Based on these results, three pillars and sub-items of the guide from a pediatric primary care perspective were drafted: prevention: disease and accident prevention; education: prevention of symptom recurrence, accident recurrence prevention, and abuse response; care coordination: multidisciplinary multi-agency collaboration and transition (phase) care.

研究分野：小児看護学

キーワード：小児救急看護　小児救急外来　養育支援　虐待対応

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

小児救急医療は、重症化する可能性のある患者を早期に発見し、早期から治療を開始することを目標の一つとして実践されている。ファーストタッチとなる看護師によるトリアージは普及が進み、重症度・緊急度の高い患者を見抜く専門性の高い医療が提供され機能している。子どもは訴えが不明瞭であり、疾患の緊急度・重症度判断や重症化の予知が困難であり、成人と比べて病態の進行が速く重症化しやすいだけではなく、発達段階に特徴的な救急疾患や事故を繰り返す。これは、幼児の 85.2%が過去 1 年間に病気になり、82.5%が医療機関を受診していた（下開，2009）ことや、救急外来受診後、3.1%の小児患者が 24 時間以内に再受診し、その理由の 6 割が「症状の改善なし」であった（佐藤他，2010）ことからも示される。また、親の不安から救急外来を受診する（岸田，2014；柳橋他，2011）、あるいは、救急搬送した 14 歳以下の 75～85%が軽症であった（東京都小児医療協議会，2013）ことからも、小児の受診に占める軽症者の多さが読み取れる。つまり、悪化の可能性のある患者を判断するトリアージの技術だけでなく、軽症の段階で終わらせる予防的な関わりを含む、いわば、小児プライマリケアの視点にもとづいた救急外来での小児救急医療は必須といえる。

小児医療には、子どもの健康を守るだけでなく、親に安心を与え、養育を支援する観点からの整備と機能が期待されるが（厚生労働省，2014）、それには受診患者を軽症の段階で終わらせる予防的な小児救急医療（市川他，2001）が必須となる。小児の救急外来では、確定診断の可否にかかわらず「帰せるかどうか」の判断は必ずなされる。これは、症状の経過を予測しての判断に止まらず、帰宅後の養育状況を予測して「その家庭に帰せるか」の見極めも含まれる。不適切な育児方法や養育環境が、子どもの病状に影響しうる状況にあっては、子どもの生活と家族の養育を含めた家族の機能や家庭環境のアセスメントは不可欠である。これは小児救急看護として構築すべき実践の一つであるが、「その家庭に帰せるか」を見極めるに十分なアセスメント方法の確立には至っていない。

小児の救急外来において、育児支援や社会医学的な観点から機能を果たす実践についてはいまだ発展途上にあり、開発を要する課題である。そこで、本研究では、小児患者が受診する救急外来を「小児プライマリケアの場」ととらえ、育児支援や社会医学的な観点から機能を果たす実践ガイドを開発する。それにより、子どもの健やかな育ちと親の適切な養育を支援することが可能となると考える。

２．研究の目的

本研究の目的は、小児プライマリケアの視点にもとづく小児救急看護実践ガイドの開発を行うことである。救急外来では、身体的な緊急度をもとにして治療の優先度を決定するために、「緊急度判定支援システム」（以下、JTAS とする）によるトリアージが機能している。しかし、養育に課題がある場合の判定は困難なため、JTAS とは別に、子どもの育ちや家族の養育状況を判断する実践の構築が不可欠である。

本研究で開発する実践ガイドは、アセスメントガイドとケアガイドで構成し、小児患者が受診する救急外来における限られた時間での判断を支援するものを目指す。開発のプロセスは、まず 2 つのガイドを作成し、次にパイロットスタディを経て両ガイドを連動させ、統合した実践ガイドとして機能するものとする。この実践ガイドにより、子どもの日常生活や家族の養育行動を判断することに焦点化した実践が可能となり、現状のトリアージとあわせて、小児救急看護の特徴的な実践として、子どもと家族の健康に寄与することが期待できる。

３．研究の方法

救急外来を受診する子どもの病状や生活環境、および養育状況に関する文献検討、および、トリアージ時の情報収集に関する調査をもとに、不適切な養育に関するアセスメント項目の抽出を行った。

救急外来における小児患者と家族に対する実践の実際に関する文献検討、および、トリアージ時の情報収集に関する調査をもとに、小児の救急外来における実践に関する課題の抽出を行った。

加えて、小児のプライマリケアに関する実践について調査を行い、小児プライマリケアの具体を抽出した。

４．研究成果

(1) トリアージ時の情報収集に関する調査

首都圏にある一小児専門病院の救急外来に勤務し、トリアージを担当する看護師 9 名を研究参加者としたインタビュー調査を行い、小児救急外来のトリアージ時に看護師が収集する子どもの家庭状況や育児状況に関する内容と収集方法を明らかにした。
その結果、次の 7 つのテーマが抽出された。

①トリアージ室での親子の「準備していない言動」から普段の様子を推察する
トリアージは数分だが、そこでの親子の関係性をみて、家でもうまくやっていけているのかどうかを見ていた。
トリアージと診察とでは親の話が変わることを前提にしており、親子の「準備していない言動」を把握しようとしていた。看護師は、トリアージに呼んだ時の親子の反応や入室の仕方を観察し、「用意していない言葉」親の第一声をとらえていた。加えて、トリアージ室に入室するときの足取りで子どもの自立度を確認していた。

②再トリアージに必要な情報として家庭の様子や養育状況をとらえようとする
トリアージ看護師は親子を診察室に届けるまでの責任を持っており、かつ、待合の環境をトリアージするという思考も持っていた。
待合では、親は誰にも見られていないと思って行動しており、親子の「背景」が見え隠れする。
急に発症した場合はトリアージで落ち着くことがあるが、育児に慣れていない親はトリアージ後も落ち着かない様子がある。看護師は、その様子を間欠的に見ながら、普段の親子の様子を想像する。救急外来で取るべき行動規範が守られているか、子どもの扱い方や物の扱い方はどうかなどを確認していた。

③自然な会話の中にキーワードを入れて話題を引き出す
トリアージは子どもの症状に焦点を当てており、不要な場合は普段の生活の話題には踏み込まないことを基本姿勢としていた。
トリアージの経験を重ねることで「ただ状況を聞く」から「想像できるように聞く」への変化があった。自然な流れで聞ける範囲の話を聞くが、普段の様子について『“学校”ではどうなのか」などキーワードを入れて聞くことで、別の課題に関する話題を盛り込むが、それを親子に気付かれないように引き出していた。
また、同じようなことを聞いているようにみえて表現を選んでいる。親にとって「いつもそうしているのですか」は責められているように聞こえるが、「普段どうしていますか」と聞くと自然に引き出せるなどと工夫をしていた。

④患者情報を共有する前提として自身が「気になった」という感覚を共有する
看護師は、自身が察知した感覚や感じたことを大事にしており、お互いの直観を信じて、そして確認しあいながら働いていた。共有される患者情報を理解するためには、そのための前提要件の共有も必要であるが、それは医学的な知識の共有だけでなく、自身の感覚の共有も含まれていた。
つまり、親の様子が何となく変や、態度が何かおかしいという感覚そのものや、直観が働いたこと自体も共有していた。

⑤子どもの発達段階と親の接し方の整合性や妥当性、許容範囲に対する見解を共有する
子どもへの厳しい口調、子どもをせかす行動など、しつけの範疇におさまらないかもしれない親の行動に目を向けていた。
自分で答えられる年齢の子どもなのに親が代わりに話す場面や、親の顔をうかがいながら話す子どもの様子などを逃さないようにしていた。

⑥子どもが親から安寧を得られているか否かは養育状況の重要なサインとしてとらえる
身体的な緊急性が低いにもかかわらず、あやされても落ち着かない子どもがいる。子どもに安寧な状態を与えられない親は、つまり養育に困りごとを抱えている可能性がある。養育状況に課題があることを想定して状況を確認していた。

⑦養育の方法が原因である可能性を想定する
受診に至った主訴でなくても発育の状況が気になったら、食習慣の話題が聞き出せるようにするなど、親の気づいていない状況を明確にしようとしていた。
年齢相応な行動がとれない子どもの様子をとらえ、親が普段の生活で困っているのではないかという視点を持って問いかけていた。

（2）救急外来を受診する子どもと家族の状況と行われている看護に関する文献検討

本研究の目的は、救急外来を受診する子どもと家族の状況と、行われている看護について、文

献検討により明らかにすることである。医学中央雑誌 Web 版を使用して、2009 年から 2019 年 5 月の看護文献の原著論文に対して「小児」あるいは「子ども」、および「救急外来」をキーワードとしてクロス検索し 92 件を得た。一次スクリーニングとして、結果に子どもと家族に関する内容、あるいは、看護に関する内容が含まれないことが明らかな 41 件を除外した。残る 51 件を目的と照合し、結果が子どもの救急外来受診に関する内容で、子どもと家族の状況、看護師のアセスメントや実践の内容について触れているものを選定し、16 文献を抽出した。これにハンドリサーチにより得た 1 文献を追加し、計 17 文献を本研究の分析対象とした。

分析対象となった 17 文献について精読し、「救急外来を受診する子どもと家族の状況」および「救急外来を受診する子どもと家族に対する看護」について特徴を抽出し整理し、キーワードや表現の選択、分類、分析において共同研究者とともに検討を行い、妥当性を高めた。

①救急外来を受診する子どもと家族の状況

緊急度の低いケースが受診の中心であり、保護者の不安による受診が存在した。また、親の想定していた転機と異なる場合もあった。

②救急外来を受診する子どもと家族に対する看護の実際

トリアージによる緊急度の判断を行うだけでなく、トリアージを通して家族にかかわっていた。加えて、虐待の存在を意識したかかわりが存在した。

（3）小児プライマリケア領域に関するスコーピングレビュー

小児プライマリケアの対象となる健康課題と援助の特徴を明らかにすること、小児プライマリケアの概念整理と、実践的専門性を高めるための研究領域の優先課題を明らかにすることを目的として、国内外の文献 67 件を対象としてスコーピングレビューを行った。

アウトカム指標として、おもにケアの継続やフォローアップへの参加、プログラムの完了といった継続性や、データの安定や症状コントロールの状況、生活や行動の変容、子どもと養育者の管理スキル、QOL などに整理された。

ケアは予防、教育、ケア調整の３つに大別されたが、国内文献では予防が抽出できなかったことから、日本の小児プライマリケアにおける予防の現状を明らかにする必要がある。身体症状に対する予防に限らず、社会的にリスクの高い子どもと家族に対する予防的介入の必要性も示唆された。

（4）小児プライマリケア領域の看護に関する調査

小児プライマリケア認定看護師に対するインタビュー調査を行い、小児プライマリケアをどのように認識し、どのような実践をしているのかを明らかにした。

現在継続分析中であるが、これまでに明らかになった結果の一端として、子どもの権利の認識とそれを擁護するための実践や家族の強みに注目した実践を行い、実践の効果をスタッフと共有して継続することが特徴として明らかになった。加えて、子どもと家族にかかわる専門職者、関連機関を描いた上で自身の実践を構築していた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 西田志穂・西村実希子	４．巻 10
２．論文標題 救急外来を受診する子どもと家族の状況と行われている看護に関する文献検討	５．発行年 2023年
３．雑誌名 共立女子大学看護学雑誌	６．最初と最後の頁 75-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Suzuki, C. and Nishida, S.
２．発表標題 Pediatric Primary Care Nursing：Scoping Review
３．学会等名 26th East Asian Forum of Nursing Scholars 2023（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Nishida, S., Nishimura, M., Hayashi, Y., Komiyama, A., & Sugisawa, Y.
２．発表標題 Ways for triage nurses to collect information in a pediatric emergency department regarding the situation of children and family
３．学会等名 Taiwan International Nursing Conference 2020（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 西村実希子・西田志穂
２．発表標題 救急外来を受診する子どもと家族に対する看護の実際に関する文献検討　－予防的なかかわりや養育支援に注目して－
３．学会等名 日本小児看護学会第30回学術集会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関